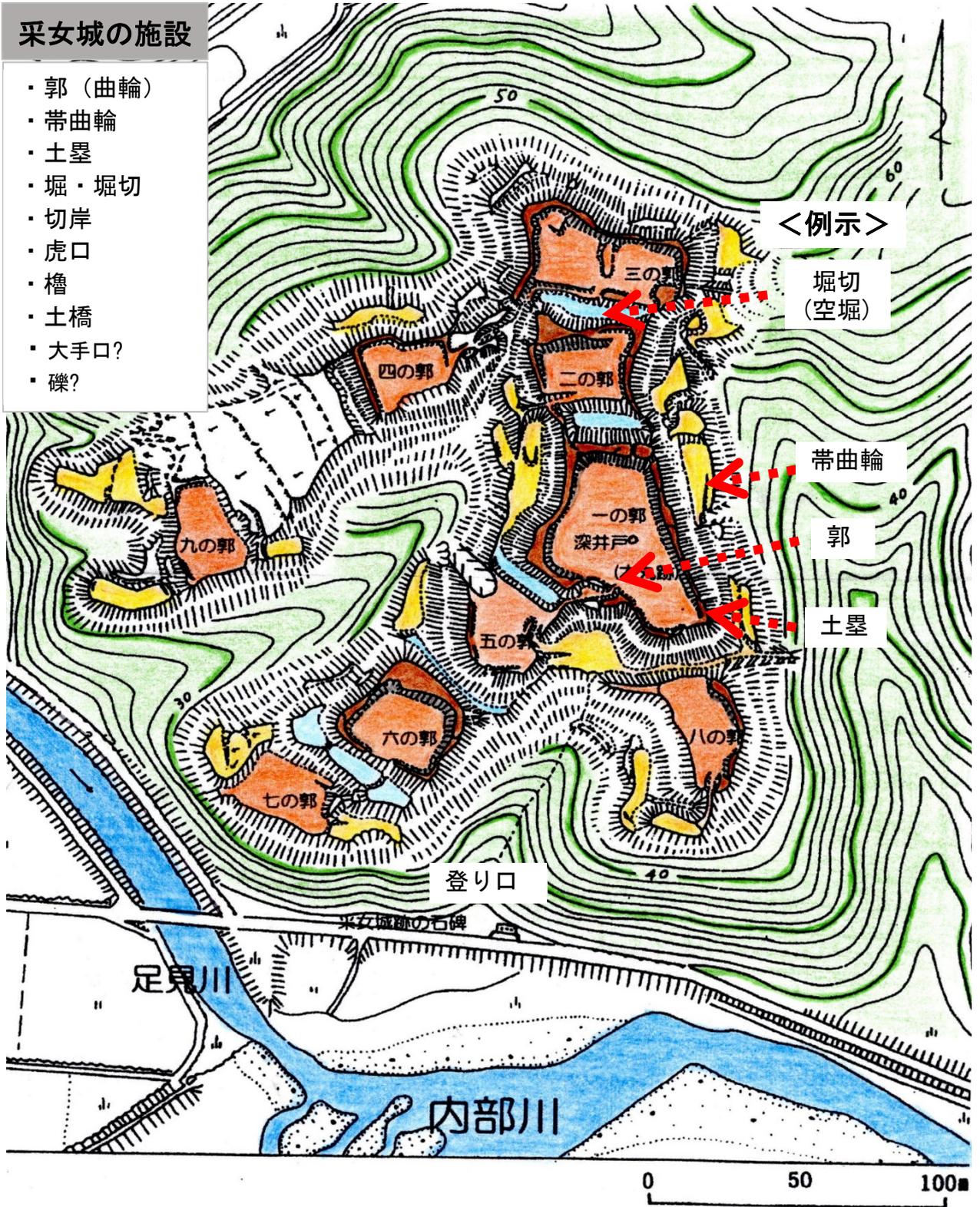


5. 采女城跡の構造

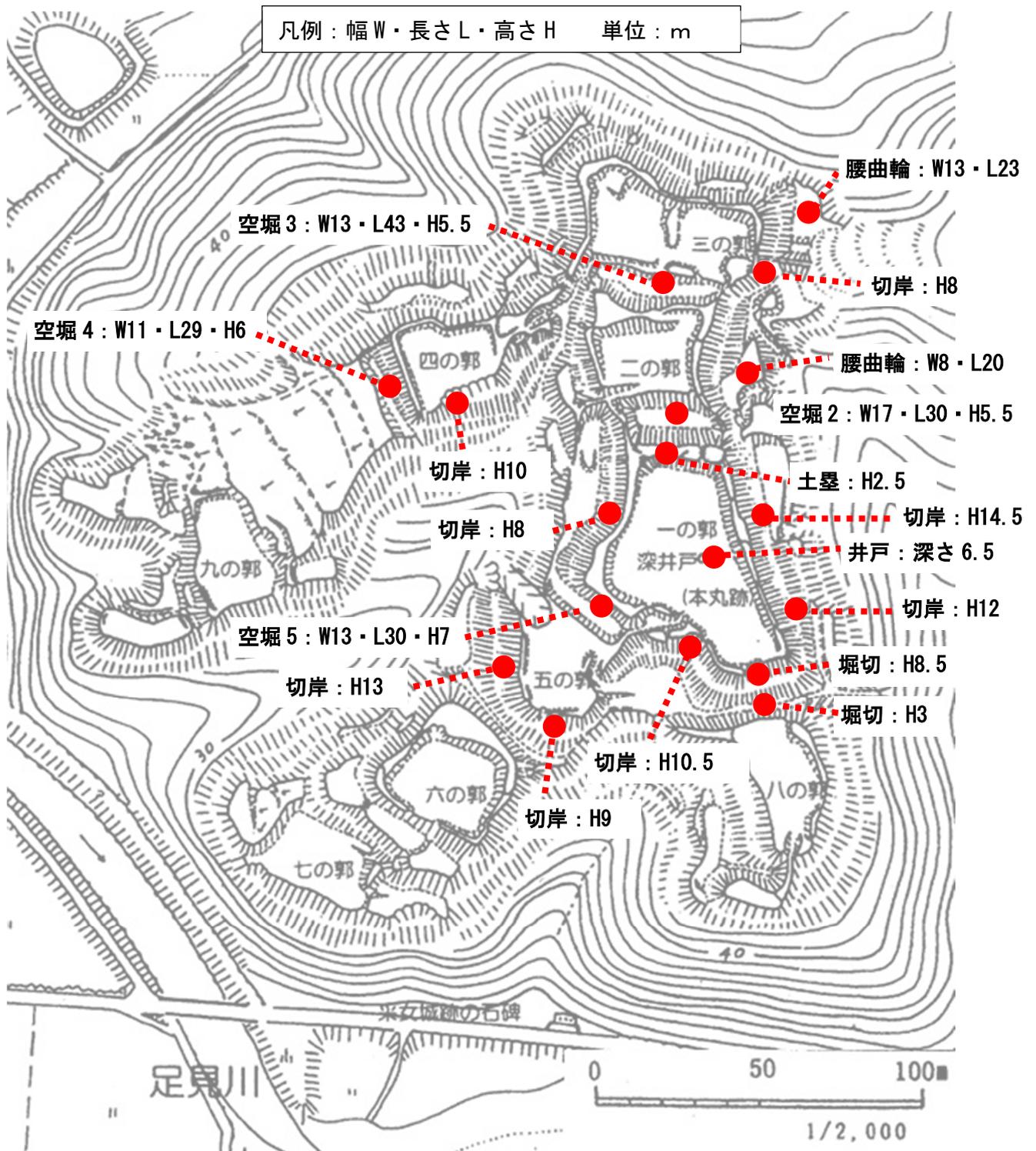
所在地 四日市市采女町字北山

付図7 采女城縄張り図



付図8 采女城跡 防御施設測量図

(計測はロープを用いた簡便法による。すべての施設を測ったものではない)



郭の大きさ (四日市市史第三巻資料編考古Ⅱ p370 より一部修正 数値は東西×南北 単位m)

一の郭：30～60×50 台形	四の郭：12～22×30 台形	七の郭：45×20 方形
二の郭：30×30 方形	五の郭：24×30 方形	八の郭：22×40 方形
三の郭：48×20 方形	六の郭：30～40×25 台形	九の郭：30～50×70 不定形

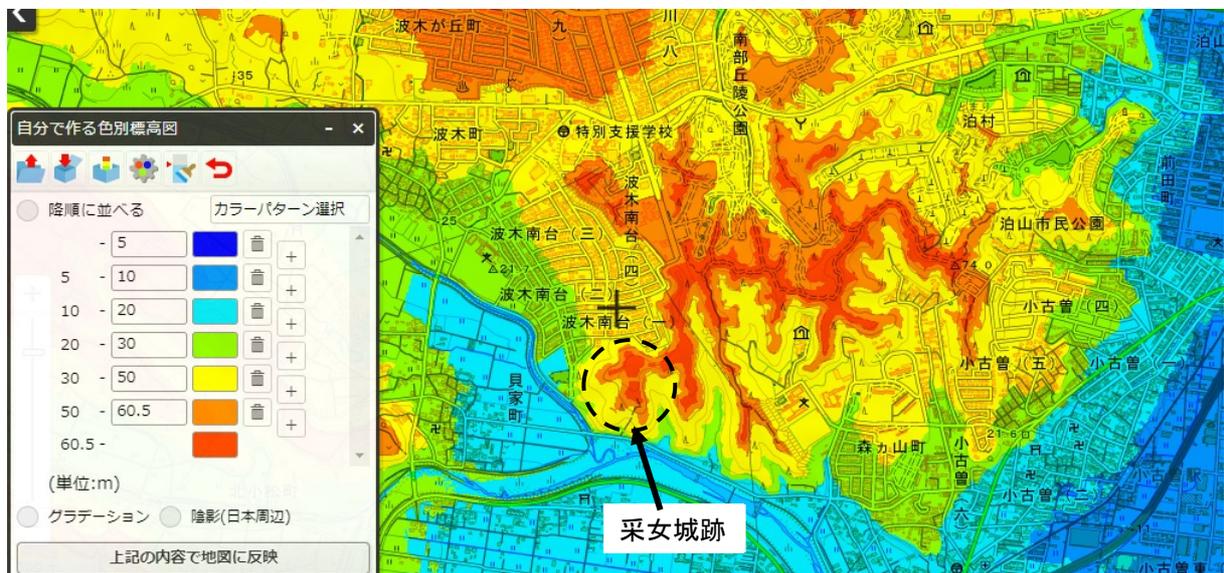
采女城跡の構造

中世山城

采女城は城主後藤家系図によると文応元年（1260）に後藤基秀が地頭に任ぜられ、この地に城を築いたと伝えられる中世山城である。鎌倉時代から室町時代にかけて地方の豪族は平時には平地の居館に住し、戦の時のみ城にこもった。この時代、平地に堅固な守りの設備を築く力はないため、城は防御しやすい山の中に築かれたものが多い。城は地形に合わせて曲輪（廓）、堀切、切岸、土塁などの防御施設が築かれ、これを塀・柵、逆茂木（さかもぎ）などで補強していた。どんな城だったか、城のイメージは末尾の「中世城館跡イメージ図」や「武蔵国腰越城復元イラスト」から類推するしかない。

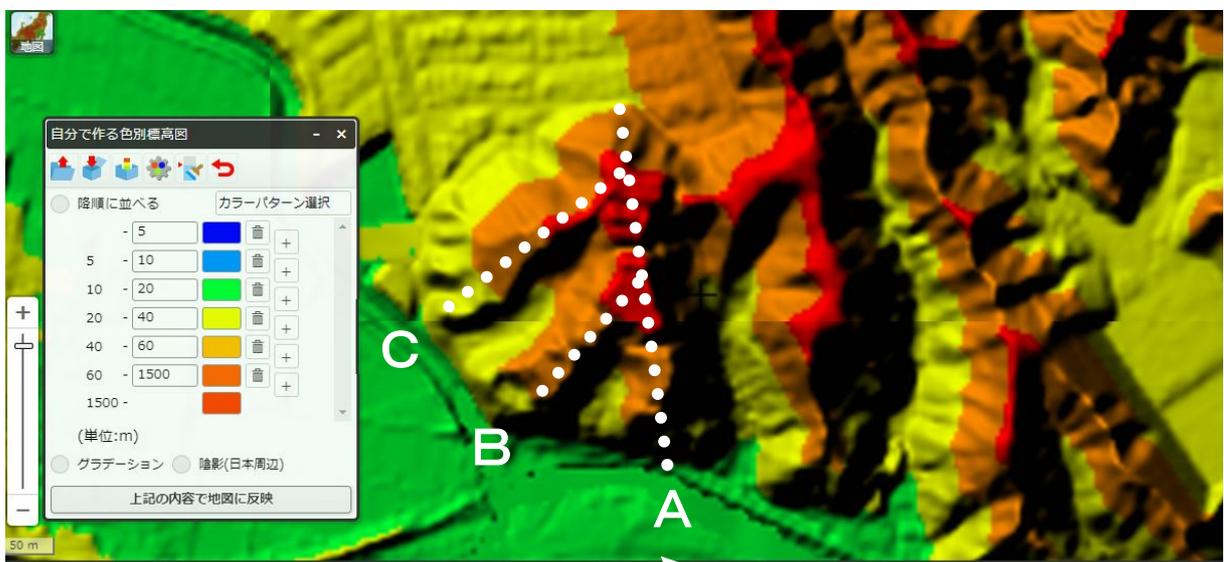
位置・地形

采女城は水沢扇状地の東端、足見川が内部川に合流する泊丘陵の西南の角に位置している。一帯は小さな谷が入り組み、60～70mの小高い尾根筋が縦横に入り組んだ複雑な地形となっている。（下図地形図参照 標高で色分けしている）



采女城跡がある采女町北山は、昭和 20 年代までは地元の里山として薪燃料や肥料の採取地として利用されていた。昔の面影を残す 1952 年の航空写真で見ると、大部分が雑木林でおおわれている。昭和 30 年代以降高度成長時代に入ると山林の利用価値がなくなり、以後 40 年あまり手入れのされないまま松林は枯れ、雑木林にネザサが 2~3m の丈となって密生し、足の踏み入れ様もない状態となっていたが、2002 年以降城跡保存会の手によって整備が進められ、2011 年には四日市市市民緑地に指定されている。

采女城は 2 つの谷を挟んだ標高 60m 前後の 3 本の尾根を利用して郭が配置され、城域は東西 270m、南北 270m に及ぶ。それぞれの郭は深い谷、尾根に穿たれた堀と積み上げられた土塁によってほとんど独立した形態となっている。内部川（標高 16m）に面した登り口からの比高は約 40~50m である。



**くるわ
郭（曲輪）**

建物や兵などを配置するために造られた空間のこと 郭の周囲には土塁や堀、柵などで囲って郭を守っていた

「くるわ」は、「曲輪」と書いたが江戸時代になって「郭」や「丸」の字もあてるようになった。最近の城郭研究では郭の字を用いることが多いという。四日市市史では郭の字を当て、保存会でも郭を用いている。

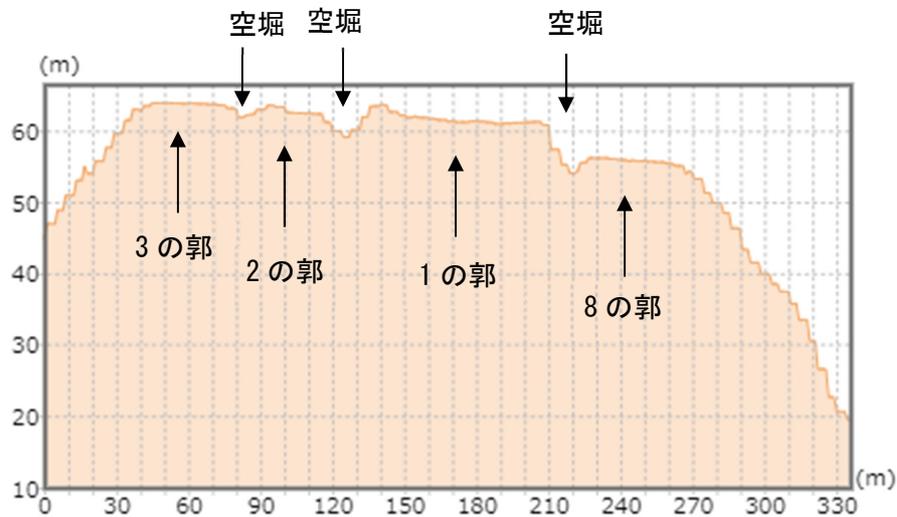
<全体配置>

城は 3 本の尾根筋（ABC とする）に 9 の郭が配置されている。主稜となる A の尾根は 3 の郭（標高 67m）から南にむかって約 300m を下り、8 の郭（標高 58m）の先から急傾斜となって内部川に落ちている。A の尾根からは支線のように 2 本の尾根が伸びている。一の郭からは B の尾根が南西に 220m 伸び、3 の郭からは C の尾根が南西に約 260m 伸びている。

それぞれの尾根には幅 11~17m の堀で切られた独立した郭が作られている。敵からの攻撃を受けた時、広い一つの郭よりも小さく区切った方が守り易いためであろう。こうして尾根筋に作られた郭は隣の郭とは堀切で、谷筋側は切岸あるいは天然の急崖で隔てられ、さらに

周囲の縁は土を盛った土塁で守りを固めた中世山城の特徴的な構造がはっきりと残っている。

これらの郭には掘立柱の建物が建てられ、兵の駐屯所や資材の貯蔵に使われた。中には鎧、具足、弓矢などの武具、竹・丸太・板など柵塀材料のほか、鋤・鍬・薪・松明・縄・筵・備蓄食料などがおかれていたことであろう。



尾根筋 A の断面図 (国土地理院アプリより)

<各郭について以下に説明する>

登り口から坂道を約 120m 上ると **1 の郭** にたどり着く。尾根筋 A の中央に位置する 1 の郭は東西 20~60×南北 50m の台形をなし、采女城の中で最も大きい。中央に深さ 6.5m の井戸があり主郭と考えられる。



北は 2 の郭との間に幅 17m 深さ 5.5m の空堀で隔てられ、南は高さ 10m の急崖となっており、人の手による切岸と考えられる。また郭を取り巻く周囲の土塁もよく残り最大 2.5m の高さがある。

1 の郭を防御する形で、東と西の谷筋には帯曲輪あるいは腰曲輪とみられる幅の狭い細長い平地が取り巻くように作られている。出入口は 5 の郭につながる南口と 2 の郭につながる北口があり、南口は大手道から二折れして急な坂を上る虎口となっている。

2 の郭 は 1 の郭の北に位置する。北西の隅には土塁が幅広くなっており櫓などの存在が推定されている。



3の郭は2の郭とは幅13m深さ5.5mの空堀を隔てて尾根筋Aの一番北に位置し、標高も67mと最も高い。東西48m、南北20mのほぼ長方形で、規模は1の郭に次いで2番目に大きい。郭の周囲が土塁で囲われ、外側には部分的に腰曲輪とみられる小さな郭がおかれ、防御を高めた様子がうかがえる。搦め手があったとするとこの辺りのどこかと思われる。東側の切岸に架けられた木階段を降りると丘陵の尾根筋につながり、南部丘陵公園（南ゾーン）まで散策道がつながっていたが四日市鈴鹿環状線（県道8号）道路工事で切断されている。

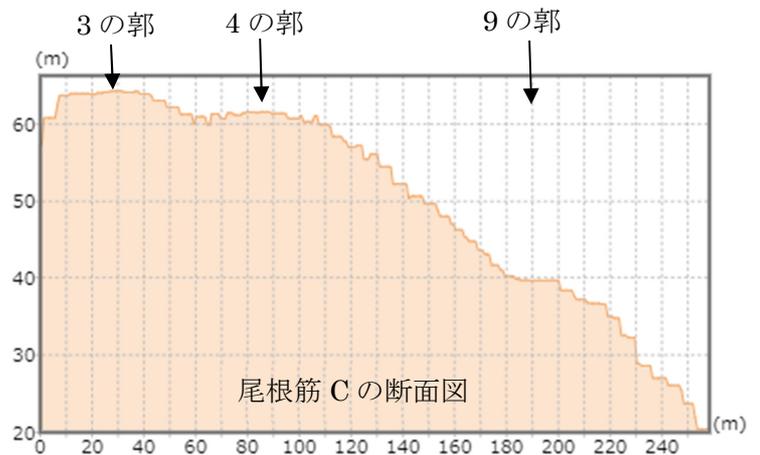
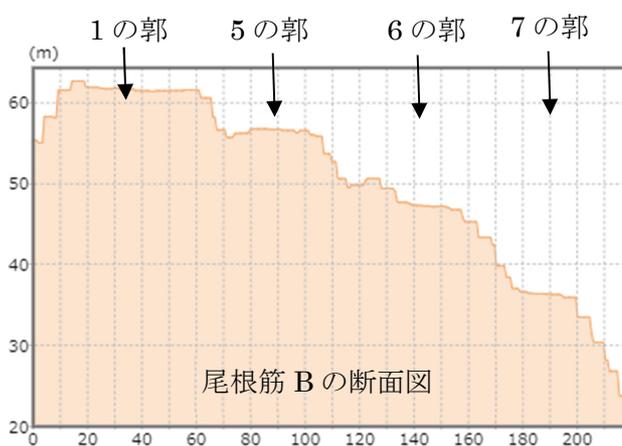


4の郭は3の郭から南西に伸びる尾根筋Cに築かれている。西と南には土塁が築かれ、西の土塁下には腰曲輪も見られ、西からの攻めに備えたものと思われる。4の郭から南西に続く尾根は9の郭まで明確な郭は見られず、どのような役目があったのかははっきりしない。



5, 6, 7の郭は尾根筋Bに築かれた郭である。

5の郭は1の郭とは空堀を挟んで一番北に位置し、大手道からの入り口は急坂の道を折れて上る虎口となっている。6、7の郭は尾根方向に広い堀で隔てられ7の郭の先で内部川に落ちている。



8の郭は1の郭の南、尾根筋Aの南端に位置し、東側には土塁、西側の谷筋には腰曲輪が認められる。郭の南からは眼下に内部川を望み、その先に采女の町を見下ろすことができることから物見の役割があったものと思われる。



なお、尾根筋 B に作られた 6 と 7 の郭、尾根筋 C に作られた 9 の郭は自然のままの状態に残すとの観点から整備の手を加えないままとしている。また 9 と 7 の郭の先には形の崩れた数基の五輪塔や近世のものと思われる墓石がまつられている。

**帯曲輪
腰曲輪**

郭（曲輪）を取り巻くように設ける曲輪 帯曲輪が短いときは、「腰曲輪」と呼ぶ

郭の周りには取り囲むように帯曲輪あるいは腰曲輪が配置され、防御性を高めている。（采女城の帯曲輪と腰曲輪の区別は難しいが、1 の郭を取り巻くこの郭は郭をまたいで長さがあることから帯曲輪とし、これ以外はすべて腰曲輪とする。）

1 の郭と 2 の郭の西側には幅 5～10m、長さ 50m の帯曲輪と思われる平地が作られ、南の端で 1 の郭と 5 の郭の間の堀切につながっている。1 の郭の東側にも 3 の郭まで腰曲輪とみられる平地が続いている。主稜とみられる尾根筋 A（1・2・3・8 の郭）の両サイドには帯・腰曲輪が多く配置されていることから、主郭である 1 の郭の守りを固める意図がうかがえる。



1 の郭西側の帯曲輪

土塁

土を高くもった土手のこと

郭の周辺には切岸部分を除いて土塁が築かれている。掘った土を盛り上げることで堀からの落差を高くした。ほとんどの郭の周囲には土塁が築かれているが、南側にはほとんど見られない。

長い年月の間に崩れて低くなっているが 1 の郭には高さ 2.5m の土塁が残っている。当時は土塁の上には塀や柵が設けられていたことであろう。



1 の郭北側の土塁

**堀（空堀）
堀切**

堀とは曲輪の周囲に掘られた溝のこと 水の無いものを空堀という 尾根の方向に垂直に（断ち切るように）造る堀を堀切という

采女城には尾根筋を真横に穿った堀切がはつきりと残されており、切岸、土塁と共に山城の構成要素を一体で観察できる見どころの一つである。ただし現地には空堀と表示されている。

尾根筋 A は 3 本の堀切によって、1、2、3、8 の 4 つの郭に切り分けられている。特に 1 と 2 間の空堀は高さ 5.5m ・ 幅 17m、2 と 3 の間の堀は高さ 5.5m ・ 幅 13m で幅、高さともに十分な大きさである。両端は土を残して土橋としていたよ



1 の郭と 2 の郭間の空堀

うに見受けられる。1と8の間の堀切は1の郭からは8.5m、8の郭からは3mの深さがある。これらははっきりした形で残っており最大の見どころとなっている。

尾根筋Bは3本の堀切によって5、6、7の3つの郭に切り分けられている。3本の堀切ははっきりと残っているが、6郭と7郭は保存会による整備対象外であるため見学は困難である。

尾根筋Cには4の郭の南に1本堀切があり、その先は斜面が続いて9の郭に至る。整備も調査も行われていないため城としての役割がはっきりしない。

切岸

曲輪の周囲を切り崩してつくった人工の急斜面（がけ）、堀と並んで中世山城の基本的な防御施設。切り崩した土砂を利用して腰曲輪を造成した

采女城の郭の周囲には明らかに人の手によるものと見られる急崖が多く認められ、切岸と思われる。

1の郭の南側の虎口に面した切岸は高さ約10mある。東側・西側も同じような切岸が認められ、底面は腰曲輪となっている。同じような例は2の郭・3の郭・4の郭にも見られる。

大手口 搦め手

城の出入り口のうち、城の正面にあたる入口を大手口という
裏門を搦め手という

現在の采女城登り口は内部川左岸沿いの市道脇にあり、ここから北に谷筋を上って主郭と思われる1の郭に入るルートをとっている。すなわちこれが現在の大手口である。しかし当時の大手口がどこにあったかははっきりしない。

現在の上り口のある市道が整備されたのは昭和40年ごろであり、それ以前は道があったとしても里道程度のものであろう。明治9年に描かれた内部村絵図には川沿いに采女小藪から貝家東浦に向かう道が描かれてので、この方向からの大手口も否定できない。

一方江戸時代の地誌『三国地誌』には「采女堡（砦の意）羽木村にあり後藤家数代居守す」、「後藤方綱 藤勝 火宮大明神（加富神社）の社頭遷宮す」の記述がある。また波木には「御苦勞」、「的場（弓の稽古場）」、「なこの坂」など城に関係する地名や伝承が残っている。子どもの頃城跡に上ったことのある年配の人によれば、「ごくろ橋」から北へ向かって室山に通じる山道が通っており、今は波木南台となっているこの道から上ったと話している。これらのことから城の大手口は西側にあった可能性が大きい。今後の検討課題である。

虎口

曲輪の出入り口のこと 多くが通れないところで小口といったが、
危険を意味する虎口とも言われるようになった
城郭の弱点部分であることから様々な防御がこらされた

現在の城の上り口は内部川添いの市道にあり、そこから北に向かって約120m上り、1の郭に突き当たったあたりで左に折れて、急坂を上って1の郭に入る。これが現在唯一の入り口となっている。突き当たったあたりは、1、5、8の郭の急崖で三方から囲んで敵を攻める構造となっている。ここには虎口の標識が立てられている。

櫓

敵を監視する櫓（やぐら）を物見櫓といった

2 の郭の北側に土塁の幅を広げた一角があり、物見櫓が建てられていたと推定される。また、すでに記した通り 8 の郭からは采女の地が一望でき、物見の役目があったものと思われる。

土橋

堀を切る時に、一部を残して橋としたもの

空堀の彫られているところ、5 と 1、1 と 2、2 と 3 の郭の間の堀には土橋が残っている。現在は木道が架けてある。

井戸

素掘りの深井戸

1 の郭には中央辺りに井戸がある。井戸のある郭を水曲輪ともいい主郭と思われる。現在の深さは 6.5m であり、水はない。この深さは空堀や切岸の高さとほぼ同じであるので、その昔水を貯めるにはこれ以上の深さがあったであろう。現在でも大手道沿いの谷筋や波木南台外周道路脇に水が湧き出ているので、井戸の場所にも水脈があるものと思われる。現在は安全対策として穴の上に格子状の蓋、周囲には柵が設けられ、中をのぞくことはできない。



つぶて（礫）

握りこぶし大の石を投げる戦国時代の伝統的戦法

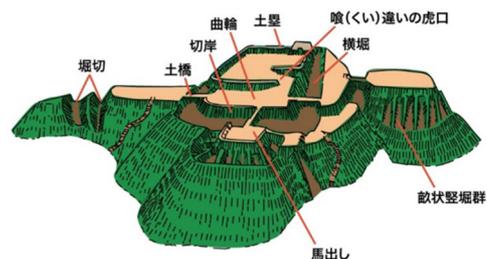
郭や帯曲輪の各所にこぶし大の石が多数見受けられ、この時代に使われた「つぶて」とも考えられる。一方城跡は水沢扇状地を侵食して流れ下った内部川の河岸段丘に位置していることから、地質的に侵食された小石が存在しているとも考えられ、今後の調査・検討を待ちたい。



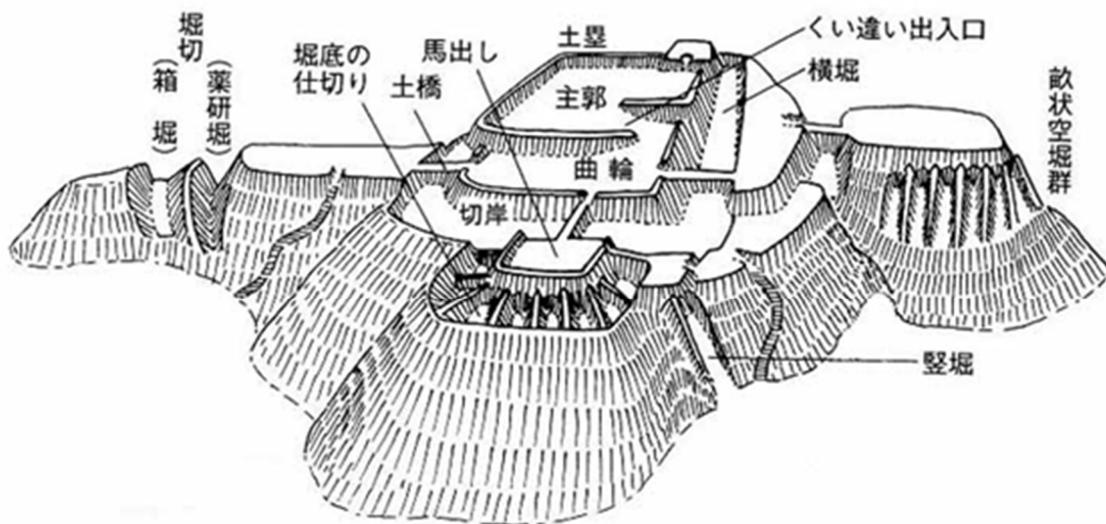
付図9 中世城館跡イメージ図・模式図 (施設の名称)

岡山県古代吉備文化財センターのホームページより
<https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/>

中世山城のイメージ図



文化庁監修「発掘調査のてびき各種遺跡調査編」の図206を基に作成 © nippon.com



中世山城の模式図 (文化庁監修「発掘調査のてびき」各種遺跡調査編の図206を改変)

武蔵 腰越城の復元イラスト (想像図)



『戦国の城全史』(学研パブリッシング 2011年)より